

「心に留める」

2023. 06. 04

崔楚英

〈導入〉

皆さんおはようございます。土浦めぐみ教会の総務主事として新たに就任した 崔楚英と申します。先月青年キャンプ終わり 5 月 7 日に就任説教の予定でしたが、前日コロナにかかってしまい、延期のなあって今日にいたりしました。その間心配をおかけして申し訳ございません。また日曜の説教を変わってくださった神田先生や、祈ってくださった方々、今日をこのように立てる機会を与えてくださった神様に感謝いたします。

木曜日から続く強い雨の影響で今日はこのようにオンラインで礼拝をささげることになりました。この雨の被害がこれ以上広がらないように、また被害を受けた方々には神様も慰めの守りがありますようにお祈りいたします。

2 か月めぐみ教会で学び信仰の友たちと一緒に働きながら、日々予想外のことの連続だなあと感じる 때가とても多いです。

しかし、**エレミヤ書の 29 章 12-14** に書いてあるように

わたし自身、あなたがたのために立てている計画をよく知っている——主のことば——。それはわざわいではなく平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。

あなたがたがわたしに呼びかけ、来て、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに耳を傾ける。

あなたがたがわたしを捜し求めるとき、心を尽くしてわたしを求めると、わたしを見つける。

とあります。私たちは現在しがわからないですが、神様は遠い未来までご覧になって計画してくださる方であるため、この時こそもっと祈り、神様の希望を与えるご計画に目を向けて一緒に礼拝していきたいと思います。

へブル人への手紙 3:1

ですから、天の召しにあずかっている聖なる兄弟たち。私たちが告白する、使徒であり大祭司であるイエスのことを考えなさい。

序論

へブル人への手紙は手紙受け取った人たちがだれであるかについて明記されていないです。ですが、多くの学者たちはその内容から手紙の受け取り手はユダヤ人のキリスト者であることには同意しています。また小さい群れでもありました。

そして彼らは福音をイエス様から聞いた人たちから聞いて信仰に至ったものたちです。彼らは信仰をもって世の中で戦ったものにも関わらず、何かの原因で福音に対しての献身が弱まっている人たちでした。(10:25) 信仰の集まりをやめようとしている人たちがでていて、著者からは「あなた方が、聞くことに対して鈍くなっている」までも言われています。

へブル人への手紙からその理由推測してみると彼らは知的な能力の足りなさよりも、(10:32-34) 引き続き終わりが見えない苦難に対しての恐れと (13:9) ユダヤ教の教えに対しての未練があるともあげられると思います。

この彼らが直面している問題に対して、著者は

「ですから、天の召しにあずかっている聖なる兄弟たち。私たちが告白する、使徒であり大祭司であるイエスのことを考えなさい。」と話しています。

1.

「天の召しにあずかっている」という表現がありますが、救いの祝福に招待されていることを表す表現です。この召しは天からのもので天で完全に味わうことができるものでもあります。ですので、目標が天にあって、この地では聖なる者として生きる人たちのことを指します。これらの人たちは地で生きる間の価値観や歩み方も天によるものであって、この地のどんなものにも属してないことを思い出せる言葉であります。

世にあるものに目を止めず、あなたたちは天に属し天のものに目を向けて生きるものとして呼び出された人立ちだと。

そして、そのようなものとして「イエスのことを考えなさい」と話ししています、この言葉を見たときに皆さんはどんなものを先に思い出すでしょうか。私を含め多くの方は十字架やイエス様の犠牲を先に思い出すのではないかと思います。それももちろん正しいと思いますが、今日のへブル人への手紙では受け取り手にはどのようなものと考えてほしかったかに対してご一緒にみていきたいと思えます。

まずイエスさまには「使徒」という表現を使っています。「使徒」とは大事な働きをするために、自分

の代わりにほかの人を送るときに使われます。「使徒」ということばは新約聖書ではイエス様の弟子やパウロによく使われています。イエス様からの命令を受け、派遣されたという意味を持っています。ほかにも使う場面はありますが、今日の本文のように神であるイエス様に「使徒」ということばを使うのは特別な表現です。

この手紙を書いた著者が意図をもってこの単語をイエスさまにあえて使ったということになります。なぜなら、イエスさまは神様から送られた方であることを強調するためですね。

神様がなさろうとすることのために、その代わりに来てくださった。ということです。

[1:4、3:3]ではイエス様は御使いよりも、モーセよりもすぐれた方、偉大な存在であることを説明しています。御使いやモーセらはユダヤ人にとっては神の言葉を伝える存在として認識しています。

神様は御使いに言葉を伝えるようにしたり、モーセを通してシナイ山で律法くださっています。ヘブル人への手紙の著作がお伝えしたいのは、イエス様はその御使いよりも、モーセよりも優れた方であって、万物を作られた神であることを、明らかにしています。またその方はみ使いやモーセがしたように、直接に神様がなさろうとすることのために送ったという意味になります。

またイエス様を大祭司とも話しますが、5:1から「大祭司とはすべての人間の中から選ばれ、人々のために神に仕えるように、すなわち、ささげ物といけにえを罪のためにささげるように任命されています」と書いています。最初からイエス様は神の働きのためにつかわされました。

その働きとは大祭司として人と神をつなげる働きでした。イエス様は彼らが待ち望んでいたどんなものよりも完璧ですぐれた存在であって、その中にすべての答えがあることを考えなさいとユダヤ人に伝えていきます。

また、神様は最初から明確な目標をもって意図をもってイエスキリストをこの地に送ってくださって、イエスさまもその意図わかり、33年の間、その目標、その意図を成し遂げるために、祈るときには祈り、教える時には教え、耐える時には静かにすべてを耐えました。33年の生涯はただ、その遣わしたかたの御心にそって歩んできたということです。

先ほど申し上げたように、ヘブル人への手紙の受け取り手のユダヤ人はたちは、信仰によって歩んできた人たちです。(6:10)「神は不公平な方ではありませんから、あなたがたの働きや愛を忘れてりなさいません。あなたがたは、これまで聖徒たちに仕え、今も仕えることによって、神の御名のために愛を示しました。」

聖徒をささえながら兄弟たちに対しての愛の行いを見せていた人たちです。それだけではなく、10:32-35「あなたがたは、光に照らされた後で苦難との厳しい戦いに耐えた、初めの日々を思い起こした

さい。」からは苦難に直面していましたが、その「苦しい大きいな戦いに耐えた」また信仰の故に牢につながっている人々の苦しみをともにした。信仰の故に不当なものをされてもそのすべてを喜んで受け入れた人たちだと認めています。

素晴らしい信仰の持ち主ではないでしょうか？

しかし、「10：25」いつのまにか、彼らの中では自分たちの集まりをやめようとしている人たちがでてるとともに、また食べ物に関しての論争からもう一度律法に戻ろうとしている様子も見られます。

なぜ、兄弟を愛し、喜びをもって苦難を耐え忍んだ人たちが、だんだん集まることをやめようとし、律法に戻ろうとしているのでしょうか？

「10：35」「あなたがたの確信を投げ捨ててはいけません」それは、そのいつ終わるかわからない迫害のゆえ、今は耐えているけどこれ以上は耐えられない。そしてそこからくる恐れで忍耐はなくなり、信仰も少しずつ薄れてしまったところです。

このヘブル人への手紙を見るとこの世の中で聖なる戦いをしているクリスチャンとリンクしているとかんじます。

神様を信じ、愛し、熱心に奉仕し、献身的に使える人々。信仰の中で集うことを喜び、神様を賛美し、苦難の中でもいつも喜び、祈ろうとする人々。

しかし、クリスチャンがとても少ないこの日本では、職場で、家庭で信仰をもって生活するだけでも忍耐をもった戦いの連続ではないかと思いました。

このような戦いとは神様の価値観と世の価値観の戦いですね、いつ終わるかわからない忍耐を必要とするものではないでしょうか？

今日出てくるユダヤ人たちののは終わりが無い苦しみ、困難を目の前にして、もっと大切にしないとけない、ものへの渴望と目標を薄れてしまいました

2.

ですので、イエスのことを「考えなさい」と、思いだしなさいと呼びかけています

人は「目に見えない永遠な価値あるもの」よりも「一時であるが、目に見えるもの、手で触れるもの、今日心で感じれるもの」などにもっと影響を受けます。

日々のたたかいこそは今日目に見えるもの、手で触れるもの、心で感じれるもの一つです。しかもいつまでか終わりになるかが見えない時にもっとそうなります。

聖書にも今の疲れ、今の食べ物、今の恐れのためにもっと心を留めるべきもの（大切なものに）をおろそかにしてしまったり、忘れてしまったりする例がたくさんあります。

簡単な例をすると、

旧約では

今日一日の疲れて、今腹を満たす食べ物に長子の特権を売ってしてしまったエサウ。

出エジプト記で今食べるものがない、今飲み水がない、目の前の巨人が恐ろしい、のことで神様の約束は忘れてしまったイスラエル人々。

ほかの角度ではありますが、福音書では

ペテロも一緒ですね。イエス様が水の上を歩いているのを見て、自分も水の上を歩けるように願い、歩きはじめたが、マタイの福音書 14:30 から「ところが、強い風を見て怖くなり」水に落ちてしまいます。

今の目のまえの物が私たちに与える影響はとても大きいし、多いと思います。

「今がない」「今悲しい」「今つらい」等々、の気持ちにおわれて、天の召しにあずかっていること、その認識がだんだん薄れてしまいます。

神様も私たちのこのような弱みをよくご存じであります。4:15 で同情できないかたではないとおっしゃっております。ですので。もっとその方をしっかり考え、信仰をもって歩みなさいと進めております。目には見えないですが、大事なものは目に見えるものではなく、信仰で生きることだと、それが永遠の命であって、本当に価値があるものだとはブル人への手紙ではすすめています。

3

私たちはこの世で生きながら価値観の葛藤のなかに生きています。いや、葛藤というより、世の価値観と神様の価値観の戦いの中で生きているというほうがもっと正しいかもしれません。

職場で、学校で、家庭で、一番親しい人との会話中にその価値観の違いが現れると、最初は優しく丁

寧に説明したりしますが、あまりにもこの価値観のずれの戦いが続くと、納得するまで忍耐できず「もういい」と思う心も出てしまいますね。

私は日本に来てから信仰が与えられ、クリスチャンになりました。今もそうですが、親戚をふくめ家族の中では一人だけクリスチャンです。ですので、祈りながら会話をしていきますが、どうしても価値観の違いを感じてしまうことは常にあります。この戦いが長くなると私の中では話題に触れただけで「もういい」という気持ちが沸き上がってくる時があります。

5年前韓国にいた時のことですが、初めてお母さんを連れて教会に行くことにしました。初めて訪問するところで、お母さんの家の近くにあるところなので、これから通うといいな、という気持ちで、お願いして一緒にいきました。「今日は平和だ」と思いながら安心して礼拝をささげていましたが、礼拝の最後に献金の時間がありました。お母さんと教会に来たことがとてもとても感謝でしたので、献金箱が隣に来た時に準備した献金をささげようと思いました。

そしたら、お母さんが私の手をグーっと押していたのです。お母さんの知らない人にお金あげてはいけないという目線で見られていました。献金箱を持っていた執事さんも次に行くこともできず、そのまま待つこともできず、とっても戸惑っていらしていました。最後献金はささげられましたが、せっかく一緒にきた日曜礼拝の始末は喧嘩でおわりました。

今考えるとその状況をもっとよく考えて、この価値観の違い丁寧に先説明しておいたらよかったなあとおもいました。このような価値観の対立は7-8年続いていたため、「もういい」という気持ちがある時に強くあったことに反省しています。本当に神様にも、執事さんにも、お母さんにも、申し訳ないことをしたなあとおもいました。

クリスチャンはこのような価値観においての戦い避けられない、この世で生きている間は一生のものではないかと思います。そのためもっと天に召しにあずかったものとしての目標を心に留めて、忍耐を持つことが大事だとおもいます。

4.

前の礼拝でも洪先生から忍耐についてお話して下さった覚えがあります。

ちょうど今週本を読んでいる中でその部分があったので一緒に分かち合えたらと思います。

皆さんもご存じだと思いますが、cs ルイスのほんでした。

CS ルイスは作者でありながらも教授であり、その余暇の時間には自分宛てに信仰の悩み相談をしてくる人に手紙を書く働きをしていました。その中である夫人に送った手紙を本にしたものがあります。その夫人は長い時間体や精神的な苦痛の中にいる人です。その人の信仰の面において、また精神面においても励ましやアドバイスし続けていました

その一文にはこのように書いてありました。「自分を土の中で忍耐しながら待っている種とを考えてください。園庭の人が定めた時期に花を咲かせ、本当の世界へと芽生えるその時を待つ種だと考えてください.... 夜明けはもうすぐきます。今手紙を書いているこの瞬間も夜明けはもっと近づいています。」と

この部分を読んで本当にそのようにたどることができるなあと、通りだなあとおもいました。

暗い土の中でいつまで時間がどれくらい過ぎたかもわからず、ただ本当の世界へと導かれることを思い、この世の歩みを忍耐し続けることです。そこには園庭が定められて時があることが希望を与えるポイントだと思います。そして、必ず花を咲かせること、その確信。

神様を信じるクリスチャンは世との価値観における戦いが日々つづいたとしても、いつかは神様の定められたときに目標にたどりつけるとのことです。

聖書が教えたそとなる人が死に、内なる人間が生きるその忍耐の段階、その段階で、神様は自分の御心を教え、訓練の時間を経てようやく約束の地へと導かれます。

最後の最後までイエス様のことを考え、神様の約束を心に留めましょう。

[ヘブル人への手紙 12 : 11-12](#)

5.

イエスさまは送られた目的だけを見上げ、命の最後まで信仰道を示して下さったことを思い出してください。

天の召しにあずかったこと、聖なるものとされたこと、目的は天にあること。このすべてを心に留め、この世での歩みを進もうではないでしょうか？

この歩みをすると、祈っても答えられない時があります。「この盃を私からとりさってください」と祈ったイエス様の祈りはこたえられませんでした。しかし、この時こそ、忍耐の時ですね。ご自分を送ってくださった神様は十分に信頼できる方で、信頼してもよい方であると十字架の死をもって証明してくださいました。

そのイエス様を見上げ、天の国を心に留め天の召しにあずかったということを忘れず

日々従順と信仰をもって進もうではありませんか。

最後み言葉を読んで終わりたいと思います。

へブル人への手紙 13：20-21

20. 永遠の契約の血による羊の大牧者、私たちの主イエスを、死者の中から導き出された平和の神が、
21. あらゆる良いものをもって、あなたがたを整え、みこころを行わせてくださいますように。また、
御前でみこころにかなうことを、イエス・キリストを通して、私たちのうちに行ってくださいますように。栄光が世々限りなくイエス・キリストにありますように。アーメン。

祈り

愛する天のお父様あなたのみながあがめられますように。

あなたの心がこの地で成し遂げられますように、私たちを天の召しにあずかってくださったことに感謝いたします。この信仰の戦いを最後まで忍耐を持ち走りぬき、いつかあなたのみ前にたつことを願っております。どうかこの世の歩みの中で目に見えるよりもあなたがくださった天のみ国に目を向け、日々忍耐し、歩むことができますように。またいつも良いものをもって私たちを整えてくださるあなたを心に留めていきますように導いてください。私たちはあなたの大いなる計画を全部は理解できませんが、あなたと日々歩むことを決心します。どうぞ今週一週間も一方一方導いてください。すべてに感謝いたします。イエスさまの名前によってお祈りいたします。アーメン